

か み さむらい づ か こ ゐん
上 侍 塚 古 墳

おたわら ゆづかみ
栃木県大田原市湯津上地内

第2回現地説明会資料 令和5(2023)年1月28日(土)

栃木県教育委員会事務局 文化財課

宇都宮市埴田 1-1-20 TEL 028-623-3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 TEL 0285-44-8441

<http://www.maibun.or.jp>

重要遺跡を調査研究・活用する「いにしえのとちぎ発見どき土器わく湧くプロジェクト」事業として進めている令和4年度の侍塚古墳調査では、昨年12月3日に上侍塚古墳の周溝(しゅうこう＝古墳周囲の堀)の調査結果について現地説明会を行いました。今回は、12月5日から始めた墳丘の調査でわかってきた、葺石(ふきいし＝古墳表面を覆う石)、古墳築造前の旧地表、江戸時代の古墳整備に関わる可能性がある土層などについてご紹介します。

a 後方部北 (E20北斜面トレンチ)

北斜面の葺石と、古墳北裾部分を確認しました。北裾は傾斜が非常にゆるくなっている部分まで葺石が設置され、それよりも北側は自然の礫層が現れています。トレンチの上部では葺石の多くが、転落したためか、なくなっています。この部分では、古墳の盛土層の下に黒色の旧表土層(矢印)が確認されました。古墳を築造する前の地表が標高141.8m前後で、今の地表よりも1.6m高かったことが分かりました。



旧表土層(古墳築造前の地面)の断面



後方部北斜面の葺石(北から)

b くびれ部東 (E15・E18くびれトレンチ、S38東斜面トレンチ)

東くびれ部は標高140mほどの平坦面で、後方部および前方部から転落した葺石が多数出土します。底面は灰褐色の砂礫層ですが、これは古墳築造に際して砂礫層より上位にあったローム層部分を削ってしまった結果と考えられます。



くびれ部東(南東から)

後方部の裾部は緩斜面で、その先は墳頂部へと続く急斜面(赤丸の範囲)です。緩斜面・急斜面ともに葺石が設置されていたとみられますが、トレンチ上端では石が確認できません。緩斜面が始まるあたりでは、小形の壺や高坏などが多量の細かい破片となって出土しました。これは、葬儀に使用した土器を意図的に割ったものと考えられます。前方部の裾部は、丁寧に削り込まれた地山ローム層の斜面です。出土する石は転落した石ばかりで、ここには葺石が



後方部の葺石(南から)



前方部東裾部(南から)

なかった可能性もあります。

江戸時代の古墳修復に際しては、くびれ部付近でも土を削っています。削ったあとの表面は現地地表下30～40cmにあり、墳丘のトレンチではなだらかな斜面として確認できます。

c 後方部西 (N0西斜面トレンチ)

斜面に敷かれた葺石と、墳丘の途中にある段が判明しました。後方部の頂上付近では、江戸時代の元禄5年に行われた発掘調査の範囲を明らかにするための調査を進めています。



後方部西側の葺石 (南西から)

